

やすらぎ堤水辺空間活用活性化事業

ミズベリングやすらぎ堤研究会 代表 鈴木 寿行

信濃川やすらぎ堤では、従来から行っている施設管理者による水辺環境の整備、行政主体によるイベント等による利用から一歩踏み出し、企業活動や市民活動の促進による水辺の賑わい創出を目指して、水辺とまちが一体となった美しい景観と新しい賑わいを生み出すムーブメント「ミズベリング」を2015年より取り組んでいる。都市・地域再生等利用区域の指定を受け、試行期間として行政と一緒に取り組んだ「ミズベリング信濃川やすらぎ堤」について報告する。

1. はじめに

日本では、河川や水路が中心となって都市景観を形成している“水都”と呼ばれる都市が多数存在し、日本海、信濃川、阿賀野川、鳥屋野潟など多数の水辺に囲まれた新潟市も、「水都 新潟」を名乗っている。

しかしながら、本来の水都とは景観要素に留まらず、人が集い、自由に利活用でき、活気に溢れ、憩い、やすらぎ、水辺が人々の生活に密接に寄り添っているまちを創造するが、近年の河川においては、貫流する都市の市街化や洪水に対する安全性の確保、河川管理者の過度な公平意識や管理瑕疵への懸念などから、人々を水辺から遠ざけているように感じている。

ミズベリングやすらぎ堤研究会（以下、研究会）では、水辺に人と活気を取り戻し、水辺を中心とした豊かな暮らしを実現するため、水辺の未来を考える地域・企業・学・官が一体となったミズベリング・プロジェクトに取り組んでいる。

2. 信濃川やすらぎ堤

(1) 地域特性

信濃川やすらぎ堤は、新潟駅から延びる都心軸と交差する自然軸、信濃川の堤防部分であり、湊町として古くからの繁華街である古町と比較的新しい繁華街である万代を繋ぐ、重要な役割を担う水辺空間となっている。



図-1 信濃川やすらぎ堤の立地環境

(2) 信濃川やすらぎ堤の整備・利活用

これまでの信濃川やすらぎ堤の整備と利活用について整理する。

a) 河川管理者等による水辺の整備

全国初の緩傾斜堤（5割勾配）として、洪水に対する安全性の確保に加え、景観や親水性を考慮した堤防を公園整備（新潟市が占有整備）と併せて整備した。



図-2 信濃川やすらぎ堤の整備（八千代橋から萬代橋を望む）

b) 行政主体のイベント等による利用

信濃川やすらぎ堤では、行政の主催・共催によるイベントが多数実施されている。しかしながら、民間の活力を活かした継続的な賑わいや、自由な水辺の利活用が根付いているとは言えない現状であった。

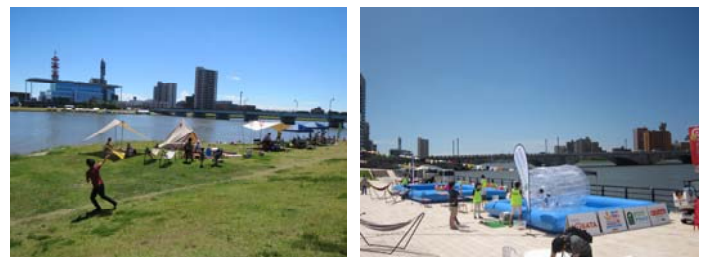


図-3 左：らららピクニック 右：まちなかアウトドア

c) 企業・市民活動を中心とした更なる利用

先行する東京、大阪、広島などでは既に河川占用許可の緩和制度を活用し、企業活動を中心とした賑わい創出、水辺空間の価値向上に成果を上げている。「信濃川やすらぎ堤」においてもカフェ等を試行していたが、都市・地域再生等利用区域の指定等を利用し、こうした企業活動を中心とした賑わいの空間としての活用を、継続的なものに促進する段階にある。



図-4 萬代橋サンセットカフェ

3. ミズベリングの取り組み

2011年の河川占用許可準則の改正により、これまで公的な利用しか認められていなかった河川区域について、民間事業者による企業活動が可能となり、時を同じくして国土交通省でも、水辺空間をもっと身近に感じてもらう、有効に活用いただく「ミズベリング・プロジェクト」をスタートさせた。

ミズベリングとは、「水辺+RING（輪）」、「水辺+R（リノベーション）+ING（進行形）」の造語で、水辺の新しい活用の可能性を創造していく全国的なプロジェクトであり、2014年3月22日のミズベリング東京会議を皮切りに、2014年10月11～12日のミズベリング大阪会議、2015年10月9～11日のミズベリング世界会議が開催され、全国・全世界へ活動の輪が広がっている。

また、信濃川の上流部に位置する三条市においても、2016年9月にミズベリングの取り組みがスタートしており、新潟県内でも、ミズベリングの輪が広がりつつある。



図-5 ミズベリング・プロジェクト 概念図

4. ミズベリング信濃川やすらぎ堤

(1) 民間組織・企業活動の体制づくり

このようなミズベリングの全国的な動きの中、2015年1月31日開催した「ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議」を契機に研究会は発足しており、2015年度には、信濃川やすらぎ堤全体の整備デザインについて検討する「信濃川やすらぎ堤デザイン検討会」へ参画し、「第2回ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議」を開催するなど、行政と一緒に水辺の利活用と推進体制の構築について検討を重ねた。



図-6 第2回ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議

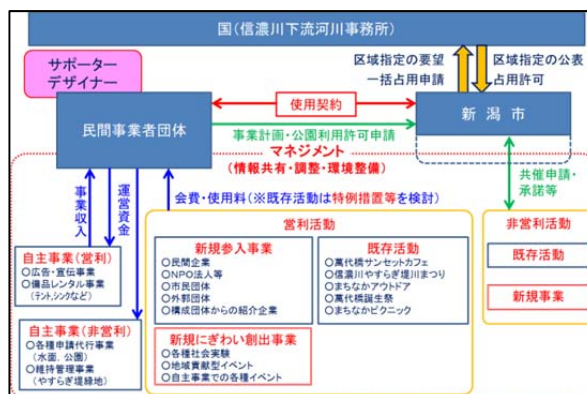


図-7 将来的な事業展開イメージフロー

(2) ミズベリングやすらぎ堤研究会 2016年度の活動

a) 行政との協働によるマネジメント

2016年度のミズベリング信濃川やすらぎ堤の体制としては、初年度ということもあり、図-8に示すとおり、占有者である新潟市と研究会の協働による調整（マネジメント）を行った。

具体的には、新規出店者の募集や選定に係る条件の整理、これまで信濃川やすらぎ堤を活用してきた団体や既存イベントとの調整、混雑時の交通整理、苦情対応などを行っており、出店者間の連絡調整を行う「ミズベリングやすらぎ堤出店者会（以下、出店者会）」を月2回、継続的に開催した。

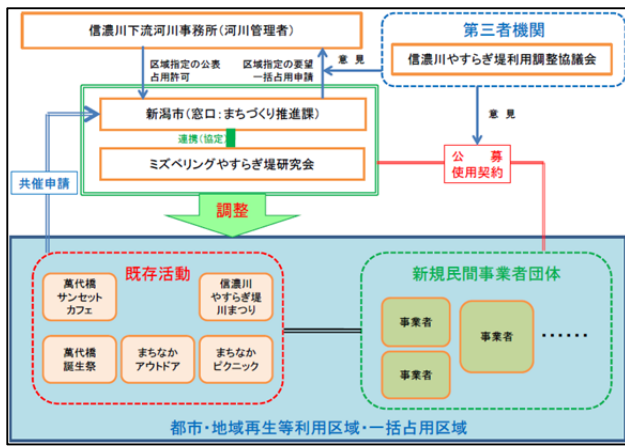


図-8 2016年度 試行的体制イメージフロー

b) オープニングセレモニー

2016年7月2日。出店する店舗すべてが営業を開始したことから、信濃川やすらぎ堤のオープン化を記念する「オープニングセレモニー」を研究会と出店者会の共催で開催した。

占有者である新潟市の篠田市長や中神北陸地方整備局長をお招きし、鏡開きと乾杯、各出店店舗の紹介を行い、お集まりいただいた多くの市民と、ミズベリング信濃川やすらぎ堤の成功を祈念した。



図-9 オープニングセレモニー 鏡開き



図-10 オープニングセレモニー 乾杯

c) 歩行者・自転車通行量調査

ミズベリング信濃川やすらぎ堤の取り組み効果を検証

し、今後に向けた基礎資料とするため、信濃川やすらぎ堤の右岸・左岸における歩行者・自転車通行量を調査した。

実施前となる2014年の調査結果と比較して、右岸側では約3倍の増加がみられ、ピーク時となる18時～19時においては約4倍の増加となった。また、左岸側においては、右岸側ほどではなかったが、約1割ほどの増加となった。

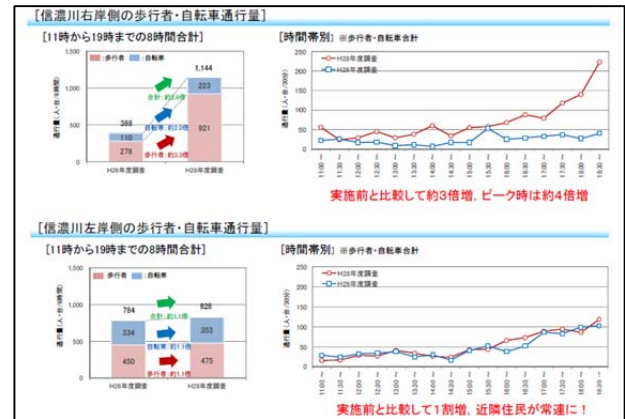


図-11 歩行者・自転車通行量調査（抜粋）

また、男女の比率及び年齢階層別の結果を見ると、比較的若い年齢層女性の割合が高く、これまでの散歩やジョギング中心の利用形態から大きく変化した結果となった。

d) 2017年度実施体制の検討

2017年度の実施体制について、占有者である新潟市と検討を重ねた。

初年度となった2016年度は、試行期間として位置づけ新規出店者を募集し、その管理や調整を行ったが、2017年度は取り組みの定着を図るため、区域全体をマネジメントいただける事業者を募集し、新潟市と一緒にマネジメントを行う体制として整理した。

定着のための期間を3年間と設定し、1年ごとに評価と検証を行うこととした。

また、施設整備（インフラ整備）の充実についても、定着期間内で行うこととし、マネジメント事業者や出店者との協議・調整を行いながら、徐々に出店しやすい環境を整備していくこととしている。

なお、本格運用については東京五輪が開催される、2020年度からを予定しており、複数年（3～5年）での施設使用契約の締結を想定している。



図-12 ミズベリング信濃川やすらぎ堤 今後の事業展開

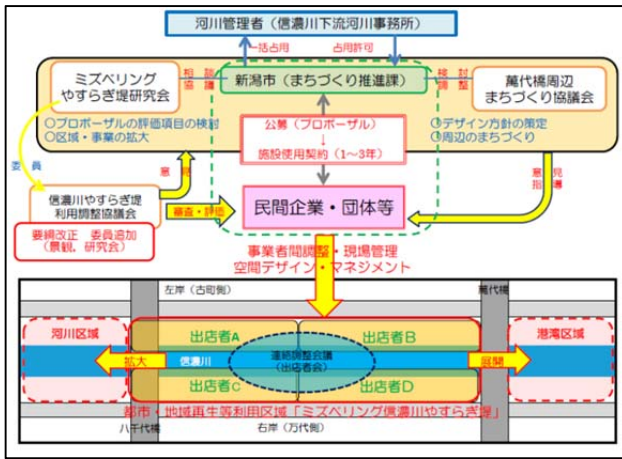


図-13 2017年度 実施体制（定着期間）

e) 第3回ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議

2017年3月25日。新潟市中央区の新潟グランドホテルにて、2016年度の実施報告と今後の「ミズベリング信濃川やすらぎ堤」の展開について語る「第3回ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議」を開催した。

当日は約70名の参加があり、2016年度の出店者や会場の参加者を交えたトークセッションでは、出店にあたっての想いや苦労した点、2017年度に向けての意気込みや提案などについて話し合われ、会場からは子供や家族向けの店舗や学生の営業体験など、具体的な提案を受けた。



図-14 第3回ミズベリング信濃川やすらぎ堤会議

(3) 2016年度の実施状況

2016年度のミズベリング信濃川やすらぎ堤の実施状況について整理する。

a) 出店店舗

新規出店者の募集を5月より実施し、新潟県内の11事業者から出店いただいた。

背後に商業地（万代シテイ）を抱える右岸側に9店舗、沿線にマンションが多く立ち並ぶ左岸側に2店舗出店いただき、連日大変な賑わいとなった。

出店店舗すべてが飲食店であり、出店期間や場所について、基本的に各店舗の自由としたため、営業開始期間がバラバラとなり、また、出店場所も点在してしまい一体感の醸成できなかった。



図-15 ミズベリング信濃川やすらぎ堤 実施状況

b) 利用者数・売り上げ

出店者会からの聞き取りによる推計となるが、最盛期であった7月～9月の利用者数は約30,000人、売上は約7,400万円となった。

利用者からは、新たな賑わい空間が出来たなどの好印象な意見を多数いただいております、出店者からも予想以上の来客と売上があったとの意見をいただいている。

c) 課題等

先に述べたとおり、営業期間や場所について各店舗の自由としたため、取り組みとしての統一感が無く、また、信濃川やすらぎ堤の景観を壊したとの意見を多くいただいた。

また、騒音やゴミの管理など日々の営業に関する苦情を多数寄せられており、2017年度の実施体制を検討する上で、その解決策についても整理する必要がある。

(4) 関連・連動イベント

ミズベリング信濃川やすらぎ堤の実施期間中、区域内及び周辺において様々なイベントが開催された。

地域との連携、回遊性を図る上でも連動・協力すべきであったが、調整がうまくいかなかった。

しかしながら、毎年7月7日19時7分に全国各地の水辺に集まり乾杯する「水辺で乾杯」では、複数の出店店舗の協力を得て実施することができた。



図-16 「水辺で乾杯2016in信濃川やすらぎ堤」

5. 他都市からの視察

ミズベリング信濃川やすらぎ堤の取り組みについて、石巻市と川崎市から視察に訪れた。

両市ともに、河川空間の有効活用について検討を進めており、取り組みの進め方や内容、課題、問題点、また、地域との関わりについて熱心に議論を交わした。



図-17 左：石巻市商工会議所 右：川崎市

6. 信濃川やすらぎ堤かわまちづくり

ミズベリングの取り組みと併せ、施設整備も進められている。かわまちづくり支援制度に登録している「信濃川かわまちづくり計画」がその一つである。

河川管理者である北陸地方整備局信濃川下流河川事務所と新潟市が一緒に進める計画であり、安全・防災の観点からの管理用通路や船着場の整備、また、賑わい創出の観点からの視点場整備など、概ね5年を目途に整備が進められている。

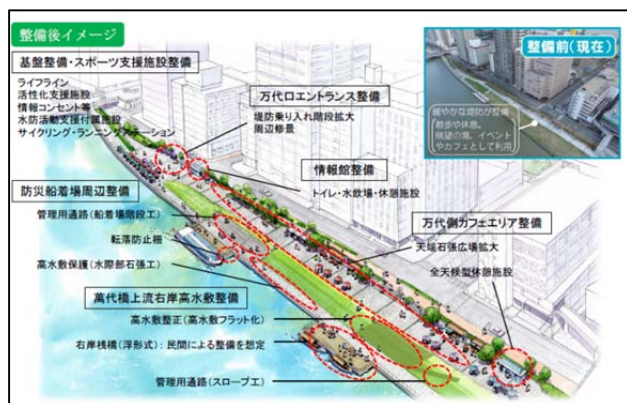


図-18 信濃川やすらぎ堤かわまちづくり計画（右岸）



図-19 信濃川やすらぎ堤かわまちづくり計画（左岸）

また、新潟市では夜の景観づくりとして、萬代橋や信濃川やすらぎ堤のライトアップ事業も進めており、信濃川やすらぎ堤の魅力がますます高まっていくものと考えている。

研究会としてもソフト面だけではなく、そこに関わるハード面についても、行政との協力体制を組んでいくこととしている。

7. これからの展開

試行的な体制ではあったが、2016年度の「ミズベリング信濃川やすらぎ堤」の取り組みは大盛況となり、大きな成果を上げることができた。

今後の活動としては、「ミズベリング信濃川やすらぎ堤」の取り組みの定着化を図るとともに、2019年1月1日の新潟港開港150周年に向け、港湾区域となる萬代橋下流域への事業展開も図っていきたい。



図-20 今後の活動展開

最後に、2015年度に引き続き、このような地域活性化の取り組みに、助成・ご協力頂いた北陸地域づくり協会様、また、PR活動にご協力頂いた方々、多様な関係者間との合意形成など、困難な作業に人力して下さいました方々に感謝申し上げますとともに、今後も「水辺から新潟が変わる」をキーワードに、全国・全世界から注目される水辺空間となるよう、活動に邁進して参りたい。